

島根県「竹島の日」制定をめぐる地方政治の隘路

——領土問題の構築と膠着——

文学研究科

人間行動学専攻 地理学専修

2025 年度

BBB24013

むらかみなゆた
村上那由汰

要旨

本研究は、島根県が竹島問題を前景化させようとした過程に着目し、その結果として外交関係や地方政治にどのような変化が生じたのかを明らかにすることを目的とする。具体的には、山陰中央新報の社説・論説の分析を通じて、竹島問題が地域の漁業問題から、国家主権・歴史認識・外交を含む多層的な領土問題へと意味づけを変えていった過程を指摘した。さらに、「竹島の日」条例の制定過程を検討することで、国の対応に対する不満が地方政治の行動を後押ししたことを示した。一方で、条例制定に対する韓国側の反応や、鳥取県における対韓交流の事例を分析し、対立の強まりと関係維持の試みが同時に存在していたことを明らかにした。以上から、竹島問題は単純な外交対立ではなく、日本政府や島根県、地方自治体の行動を通じて重層的に展開してきた問題であり、そのことが問題の複雑化と長期化をもたらしていると結論づけた。

【キーワード】 竹島の日、政治地理学、日韓関係、地方政治、重層性

目次

I 研究目的と背景

- 1) 研究課題と意義
 - (a) 問題の所在
 - (b) 研究の意義
- 2) 竹島問題の歴史的経緯
 - (a) 近代以前から 1905 年編入まで
 - (b) 領土編入から李承晩ライン設定まで (1905 年～1952 年)
 - (c) 漁業問題の深刻化 (1977 年～1999 年)
- 3) 先行研究の整理
 - (a) 竹島問題研究の概観
 - (b) 政治地理学における領土・境界研究の理論的展開
- 4) 本研究の視角

II 山陰中央新報社説・論説にみる「竹島問題」の意味づけの変遷

- 1) 竹島関連記事の件数推移と本章の対象
- 2) 本章の課題と分析対象
- 3) 分析対象と分析方法
- 4) 「竹島問題」の変遷と傾向
 - (a) 竹島問題の位置づけの変化
 - (b) 問題を構成する空間スケールの変化
 - (c) 日本側主張を支える根拠の重層化
 - (d) 日本政府への要求の変化
- 5) 小括

III 「竹島の日」制定の過程とその影響

- 1) 条例制定に関わる主体（アクター）
- 2) 条例制定への動き
- 3) 条例制定直前の県議会の動き
- 4) 条例制定の背景にあった議員の当事者意識
- 5) 条例制定後の影響

IV. 条例制定に対する韓国側の反応

- 1) 対岸から見た「竹島の日」条例
 - (a) 慶尚北道・韓国政府の当初の抑制的な対応
 - (b) 韓国世論の圧力による方針転換
- 2) 韓国世論と領土ナショナリズム
- 3) 条例制定の日韓の安全保障関係への影響
 - (a) 韓国政府の抑制的対応
 - (b) 経済的相互依存の変化と「放置」の合理性
 - (c) 世論と政府の乖離がもたらす安定

V. 鳥取県による対韓交流の回復

- 1) 「竹島議連」の解散
- 2) 米子—ソウル便の存在
- 3) 首長同士の関係構築
- 4) 島根県との比較考察

VI 結論—地方政治の隘路

- 1) 本研究の整理
 - (a) 山陰中央新報社説・論説にみる竹島問題の変容
 - (b) 条例制定過程と政府の不在
 - (c) 韓国側の反応と日韓関係

- (d) 鳥取県との比較からみえる制度的選択による分岐
- 2) 「地方政治の隘路」の様相
 - (a) 対韓交流の途絶と回復の困難
 - (b) 日本政府との距離
 - (c) 他自治体・隣県との乖離
 - (d) 県内における温度差
- 3) 重層化した「孤立」の打開に向けて一むすびにかえて

謝辞

参考文献

謝辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々からご支援とご協力を賜りました。まず、現地調査に際して温かく迎えてくださり、貴重なお話を聞かせてくださった隠岐の島町、海士町の皆様に、心より御礼申し上げます。皆様との出会いと対話は、本研究を進めるうえで大きな支えとなりました。

また、資料の提供や研究上のご助言を賜りました島根県竹島資料室の皆様、島根県竹島問題研究会の先生方、島根県立大学の福原裕二先生にも、深く感謝申し上げます。皆様からいただいた知見とご厚意によって、本研究の視野を広げることができました。

さらに、研究会で切磋琢磨した大学院生の皆様、ならびに大学院の研究室のメンバーの皆様からも、多くの示唆と励ましをいただきました。議論を重ねるなかで、自らの研究を見つめ直す機会を得ることができたことに、心より感謝しております。加えて、大学院進学と修了を応援してくれた八日市高時代の教え子の皆さんの存在にも、大いに励まされました。

そして何より、指導教員である山崎孝史先生には、研究構想の段階から調査、執筆に至るまで、終始丁寧なご指導を賜りました。社会人を経て外部から進学した私を温かく迎え入れてくださり、向こうみずになりがちであった調査計画や、理論を先行させすぎる研究姿勢に対しても、その都度適切なご助言をいただきました。先生のご指導を通じて、現場に根ざして考える地理学の大切さと面白さを学ぶことができました。

本論文は、このような多くの方々のご支援とご厚意の上に成り立っております。未筆ながら、ここに記して厚く御礼申し上げます。